

浄土

monthly JODO

2020
September

9

貧乏骨董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



貸本屋のゴム印とS君の落書き



『宇宙空港』(鈴木出版/1960年)、『スリル博士』、『秘密指令第3号』(ともにあかしや書房/1961年)。右は光文社の『西遊記第二集』の本文ページ(1960年)



前回書いたようにこの『ロック冒険記』は、山形県のS君が貸本屋さんから手に入れたものである。奥付の対向ページに「貸本 新國 米澤市門東町下」のゴム印が押されている。その下には、おそらくS君の大きな落書き。ほかのページにも落書きが数カ所。これでは古書店は買い取ってくれないはずである。

この本が貸本屋に置かれていたからといって、貸本屋向けに発行されたわけではない。一九五三年あたりから、貸本屋向けに特化されたマンガの本が出版されはじめるが、この本は一般書店向けに発行されたものである。定価は一三〇円。五六年当時、この値段が一般的に高いものであったかどうかはわからないが、子どもの私にはとても買える値段ではなかっただろう。

私が貸本屋に通うようになったのは小学三、四年生のころである。一泊二日で一冊借りて一〇円だったろうか。これならわずかな小遣いでも兄弟三人が力を合わせれば、月に一〇冊のマンガを借りることができた。

手塚治虫の作品集は五〇年代から六〇年代はじめてかけて、鈴木出版の『手塚治虫漫画選集』(五八年から六三年。全二十五巻)と、光文社版の『手塚治虫漫画全集』(五八年から六〇年。全十七巻。『鉄腕アトム』『ジャングル大帝』『西遊記』といった長編を取録)、あかしや書房の『手塚治虫傑作選集』(五六年から六一年。全七巻。『ケン探偵長』『スリル博士』など)の三種類が刊行されている。ほぼ同時期の刊行だが、作品の重複はない。このあたりにも手塚治虫の抜きん

出た力量がうかがえる。

売れずに手元に残っているものの一部を載せてみた。どれもなつかしい思い出がつまっている。

兄とふたりで福岡市内の廃業間近の貸本屋を訪ねて、買ったり譲ってもらったりしたものである。戦後のシステムとしての貸本屋の時代は終わろうとしていた。もう五十五年以上も昔のことだ。

インド渡航歴40回超！

佐藤良純の No. 4

インド・釈尊あれこれ紀行

インドといえばカレー。写真は
何種類ものカレーが並ぶ豪華版。



果物は種類が豊富で色とりどり。



スパイスやカレー粉も数え
きれない種類がある。



お店や路上でいろいろな
食材が手に入る。

インドの食材

インドの人々の主食は、北インドは麦のチャパティ、南インドはお米である。ただしブツダの属する釈迦族の王には淨飯王など、飯をつかう名前があるので、北インドにも違う食文化をもった人々がいたようである。ちなみに日本人も米文化人で、天皇が新しく即位する儀礼として一晩稲わらをまとって寝すむ習慣がある。

インドといえば誰しも一番にカレーを思い出すが、カレーの原語は南インドで「カリ」と呼ばれた香辛料でスパイスである。クミン、シナモン、ターメリック、ナツメグなど、漢方薬として使われるものも多い。カレーは辛いと思われがちだが、北インドのカレーは辛



インドの食材

くない。一方、南インドのカレーは辛いと言われるが、そうではないカレーもあり、何とも言えない。

アーリヤ人たちは遊牧牧畜民族であったが、インドで最上のジャータイ（階級）のパラモンが菜食であったので、アーリア人の中にはそれをステータスシンボルとする菜食主義者が多い。特にジャイナ教徒の中には土の中に育つ根菜類を食べない人もいる。

食材は地域によって大きく変わる。海に近

いベンガル、南インドのチェンナイでは魚が多く、川しかない北インドでは物理的に魚は少ない。私の暮らしたデリー大学ではなんでも食べることができたが、普通の人々はお米のご飯はお祭りの時だけしか食べられない。ただし、炊いている途中で湯を捨てるのでご飯がパサパサになる。いまは北インドではコシヒカリを生産している。

果物も豊富で特にマンゴーやバナナには種類が多い。かつて、南インドで大きいバナナを食べようとしたら、「それは馬用だ」と止められた。マンゴーも「キングオブマンゴー」と呼ばれるアルファンソーが有名であるが、その汁は一度衣類につくと取れないので、「裸で食べろ」と言われたくらいである。インドにはその他数え切れない種類の果物がある。いまやインドでも日本の食材が簡単に手に入れられる。デリーにある大和屋へはしばしば訪れたが、みそ、醤油、とうふ、麺類なんでもある。また、日本にもインド料理が早く



から伝えられている。銀座歌舞伎座近くのインド料理店ナイルは、南インドのナヤールジャータイ出身のナヤールさんが始め、今は二代目である。新宿中村屋は「カレー」ではなく「カリ」の名前にこだわる。中村屋がカリを始めた経緯は、インド独立を志したベンガル出身のボース氏を中村屋でかくまい、連絡役をつとめた店主のお嬢さんをボース氏がお嫁さんにした因縁にある。戦後ではインド大使館近くのアジアンターが有名である。しばらく前のインド料理店ブームもあり、いま日本にあるインド料理店は中華料理店と同じくらいの数があると思われる。

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとうりょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職。大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書に「ブツダガヤ大菩提寺」、「釈尊の生涯」など多数。

級友とお屋のサンドイッチを食べる佐藤良純師。
外国人向けサマーキャンプの宿舎にて。



写真で訪ねる インドと釈尊

2

果物大国

池などの水中で取れる黒く三角形の果物、シンガーラ。
甘くない栗の味だそうだ。



道端で色とりどりの果物が売られている。



インドではいつもお世話になる
という友人のピノード・ジャイン氏が季節の果物を選んでくれる。平成29年秋インド旅行にて。



50余年前の留学時代、ヤシ
の果汁を飲む佐藤良純師。

インドの食材の中でも色鮮やかなのがフルーツだ。
日本では見たことのない種類も多く、写真のよう
な黒い果物もある。南の島でヤシの実から直接果
汁を飲んだこともある方も多いかと思うが、50年
前に佐藤良純師が初椰子の実を緊張したおもむき
で飲んでいる写真が残っている。

浄土

2020/9月号 目次

連載 インド紀行④ インドの食材	佐藤良純	1
インド写真紀行 果実大国		4
寺々刻々③ アフターコロナの葬送と寺院	鶴飼秀徳	6
【新企画】 ぶつぶつ放談 疫病とご法語		14
微風吹動 20年目の青い空	工藤量導	20
連載小説 渡辺海旭⑩	前田和男	24
オフィス訪問「戸田葬祭場」	真山 剛	30
連載 マンガ さっちゃんはネツ	かまちよしろう	31
編集後記		32

表2 貧乏骨董

三宅政吉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

『寺院消滅』教養としての仏教』著者

鳥飼秀徳の寺々刻々

寺院に襲いかかる厄介な問題

雨音を聞きながら、本稿を書いている。先日、梅雨の晴れ間に近くの神社にお参りした。この時季は「茅の輪くぐり（夏越の祓）^{はらへ}」の神事が多くの神社で実施されている。茅の輪くぐりとは、鳥居などに茅で作られた大きな輪を設置し、そこをくぐって無病息災などを祈る儀式だ。今年の半年の厄を落とし、心身を新たにして下半期を迎える意味がある。

多くの人はこの半年を「リセット」したい心境だろう。私たちは「新型コロナウイルス」に翻弄され続けた。仏教界も例外ではなく、悩ましい問題が次々と出現した。主な問題・論点として私は次の4つを挙げる。

①「濃厚接触の回避」に伴う仏事の簡素化、②オンライン法要などの新しい仏事スタイルの出現とその是非、③宗教法人に対する持続化給付金問題、④コロナ時代の葬

京都・平野神社の茅の輪くぐり



茅の輪と同じご利益のある祇園祭のちまき（茅巻き）。
京都では家の軒に飾り厄除けを願う風習がある。



送への向き合い方——である。①②については既に本誌で述べたので割愛したい。ここでは主に③④について触れる。

集会や移動の自粛ムードの中、年忌法要を修することが憚られる風潮が広がり始めたのが3月下旬。その後、タレントの志村けんさんや岡江久美子さんがコロナ感染によって亡くなり、葬送も満足にできない様子がメディアの報道によって広がった。すると、葬式は最小限の規模で、不要不急の法事は中止にするという風潮が急拡大した。人が寄り付かなくなった寺は収入が閉ざされ、特に地方寺院は苦境に立たされている。

寺院は持続化給付金の対象にならず

そこで、国の経済的支援策である「持続化給付金（上限200万円）」を、宗教法人も対象にするかどうかで、永田町や関係者の間で議論が進められていた。

同給付金は、学校法人や社会福祉法人、NPO法人なども幅広く適応対象となっている。だが、石原伸晃元経済再生担当相が「宗教団体に公金を入れれば、国民から政教分離の原則違反を疑われる」と表明し、案は流れてしまった。宗教法人が外されたことで「寺院消滅が加速

表①寺院の年間収入と年間葬儀回数

寺院の年間収入	全寺院		村落寺院	
	構成比	年間葬儀回数	構成比	年間葬儀回数
100万円未満	18.20%	2.6	30.90%	2.6
100万円以上300万円未満	25%	6.3	31.90%	5.8
300万円以上600万円未満	19.00%	10.8	18.10%	10.6
600万円以上800万円未満	10.50%	15.7	7.40%	14.2
800万円以上1000万円未満	9.80%	18.2	6.00%	19.7
1000万円以上2000万円未満	11.60%	27.4	4.90%	29.5
2000万円以上	5.90%	55.9	0.80%	44.1

するのではないか」との懸念が生まれている。

確かに、裕福な寺院に持続化給付金を出すのは筋違いだ。例えば、都市部で巨大納骨堂を運営している宗教法人や、これまでインバウンド需要で恩恵を受けてきた京都の拝観寺院などである。コロナ感染症蔓延によって観光客が来なくなり、いくら収入が激減したとはいえ、それだけでは国民の理解は得られるはずがない。

なぜなら宗教法人は税法上の優遇措置を受けているからだ。つまり、宗教活動や収益事業以外の事業収入について、法人税（や固定資産税、相続税）がかからないのである。「宗教活動に関する収入」とは主に葬儀や法事の「お布施」のことである。「収益事業以外の事業」とは具体的には、霊園経営、幼稚園経営、御朱印やお守りなどの宗教活動に関わる物販、拝観料などだ。

逆に、一般事業者でも扱える品目（例えば、ろうそく、線香など）を寺院が販売した場合（収益事業）には課税される。

だが、物販や幼稚園経営、有料拝観などの「サイドビジネス」をしている寺院は一部である。檀家数も多く、さらに様々な事業を手掛け、経済的に潤っている寺院と

表② 寺院の護持運営と年間葬儀回数

寺院収入での寺院護持	全寺院		村落寺院	
	構成比	年間葬儀回数	構成比	年間葬儀回数
十分護持・運営できる	9.80%	39.9	3.80%	28.6
なんとか護持・運営できる	38.60%	18.2	26.70%	15.3
護持・運営は厳しい	34.20%	7.9	40.30%	6.7
まったく護持・運営できない	17.40%	3.3	29.20%	3.2

【調査概要】

- 1) 調査期間：2009年9月1日を基準日として、4種（寺院票、住職票、坊守票、門徒票）の調査票を全国の寺院に配布。
 - 2) 調査数：1万280通の調査票を配布、回収された調査票は6126通。回収率59.6%
- 注：村落寺院の定義として①寺院の所在が農山漁村、②周辺人口が停滞もしくは減少、③周辺人口のほとんどが昭和40年代以前からの住民

なればほんの一握りだ。こうした寺院は、給付金どころか、むしろ社会還元を率先してやっていかねばならないだろう。

実際には全国7万7000カ寺ある大多数の寺院は、葬儀や法事による布施収入と、墓地管理料の2つを主たる収入源にしている。その実、地方都市の寺院の中には生活保護受給レベルの困窮生活を強いられているケースも少なくない。

寺院の収入を細かく調査しているのが浄土真宗本願寺派である。1959年より5年おきに宗勢調査を実施している。その調査報告の中で、村落に所在する寺院の年収と葬儀実施数の項目をピックアップしてみたのが表①だ。都市と地方で、寺院の「格差」が生じていることがよく分かる。地方の寺院では多くが困窮し、存続が危ぶまれている状況である。

本願寺派の場合、全寺院の半数強（54%）が農山漁村に位置する。表①にあるように村落寺院の6割強（62.8%）が自活できないレベル（300万円未満）である。村落寺院のうち、住職の約7割（69.5%）が現在の寺院収入では寺が存続できないと回答している（表②）。

地方都市では無住寺院が増加



布施の単価も都市と地方都市とで大きな差がある。例えば、山陰や南九州における葬儀の布施平均額は全国平均の3分の1以下である。布施額はおおむね都市部が高く、地方で低い傾向がある。

こうした実情の中、コロナ禍がやってきた。このままコロナ禍が長引けば、経営破綻する地方寺院が出てくることは間違いなさそうだ。

地方の寺院が消えていけば、憲法で定められている「宗教の自由」の選択肢は狭まっていく。また墓地の管理ができなくなり、地域住民の心の拠りどころが失われる。さらに防災拠点としての寺院が消えたり、文化財が守れなくなったりすれば、公益の観点でも多くの問題が生じる。

持続化給付金が宗教法人には適用にはならなかったのは政治家がこうした寺院の機能について無知・無関心であったことや、「政教分離」を過剰に意識したことなどが背景にある。翻れば、寺院は社会にとってさほど必要ではないと思われているのだろう。

特に包括法人はこのコロナ禍をきっかけにして、寺院が果たさねばならない役割をしっかりと議論し、社会に

提言していかなばならないだろう。

医師も葬儀のあり方に警鐘

では、個々の寺院はどうすればいいのか。寺や僧侶がウィルスの媒介者になつてはまずいが、過剰な防衛は諸刃の剣ともなりうる。感染防止か、寄り添いか。その判断を誤れば、仏教の地盤沈下にもつながりかねない。

5月20日付文化時報の社説は「遺体を怖がる僧侶」と題して、こう論じている。

「ある僧侶のグループは、感染症患者の遺体から感染することを警戒し、早急に火葬して遺族との接触を避けるよう推奨した。遺族にもそう勧めることや、僧侶が火葬への立ち会いを拒むことまで認めている」

一方で5月19日付東洋経済オンラインでは「新型コロナウイルスでも普通の葬儀ができるはずだ」と題する記事が掲載された。国立病院機構仙台医療センター臨床研究部ウィルスセンター長の西村秀一医師のインタビューである。

志村けんさんや岡江久美子さんの遺族が、最後のお別れや立ち会いができなかった例を挙げつつ、西村医師は、「日本中でそんなことが行われているのか。悲しみに暮れる遺族の心をさらに踏みつけるような仕打ちだ。（中

略）遺体に触らなければ何の問題もない。新型コロナウイルスよりも怖い病気はいっぱいあるが遺体について今回のような扱いはしていない。たとえば、多剤耐性（薬の効かない）の結核だとか、エイズだとか、肝炎で亡くなった場合でも今回のような指導はしていないし、それでも遺族に感染したという話は聞いたことがない。なぜ、今回は別なのか」と憤っていた。

この記事自体は葬送従事者の対応を諫めるものだったが、遺体の近くで引導を渡す仏教者にも向けられた言葉でもあると捉えてよい。

文化時報の記事も、西村医師も「死に関わるプロは、もつと覚悟をもて」と言っているのだ。僧侶の思考や哲学、知恵、立ち振る舞いが試されている。

常に寺院は感染症と向き合ってきた

ところで過去、感染症流行の局面で寺はどう振る舞ってきたのだろう。歴史から学べることもありそうだ。

私はコロナウィルス感染症が拡大する直前の今年1月下旬、大阪・天王寺区の一心寺にお参りする機会があった。この時、たまたま境内で興味深い慰霊碑を見つけた。碑には「大正八九年流行感冒病死者群霊」と刻銘されて

一心寺にはスペイン風邪の供養塔が残る



いた。これは、今から100年ほど前に流行した「スペイン風邪」による病死者の慰霊碑である。施主は大阪の薬剤師となっている。

国立感染症研究所感染症情報センターによれば、1918（大正7）年に始まったスペイン風邪は世界各国で猛威をふるい、日本では約2300万人の患者と約38万人（別説では45万人）の死亡者が出たという。大阪では死者1万人以上を出しており、それを悼んだ薬剤関係者が一心寺に慰霊碑を建立したのも頷ける。

慰霊碑や墓は、「無言の証言者」である。そして供養を続ける寺は「語り部」としての機能を果たす。

寺に残るのは石碑だけではない。死亡者の記録も保管されている。そこで私は先日、全国の知り合いの寺10カ寺に頼んで、スペイン風邪が流行した大正7～9年の葬式の実施数をカウントしてもらい、その前後年の平均値と比較してもらった。

すると、多くの寺で流行期間の葬式数は平時の2～3倍の高水準であった。ちなみに小利では、大正年間における葬式の平均数は8件ほど。だがこの3年間に限っては14件、11件、20件と平均以上の多さだった。



京都の祇園祭も天然痘の蔓延をきっかけで始まった

うかい・しゅうとく 1974年京都市生まれ。大学卒業後、新聞記者、雑誌編集者を経て、2018年にジャーナリストとして独立。社会と宗教との関係性を明らかにすべく、取材を続ける。著書に「寺院消滅（日経B.P.）」「仏教抹殺（文春新書）」など多数。近著に「ビジネスに活かす教養としての仏教」（PHP研究所）。嵯峨・正覚寺副住職（一社）良いお寺研究会代表理事、佛教大学・東京農業大学非常勤講師。今年9月中旬には新刊「仏員とノーベル賞 京都・島津製作所創業伝」（朝日新聞社）を上梓予定。

東京都北区のある寺院は、死因まで丁寧に記録されていた、と教えてくれた。「疫痢」「流行性感冒肺炎」などと記されていた。恐らくスペイン風邪に罹患したのだらう。寺院記録から伝染病の流行の事実が浮かび上がった。

時代をもっと遡れば江戸末期の安政5、6年にはコレラが大流行した。感染源は長崎に入港したペリー艦隊だと言われている。再び小利の記録をめぐってみる。確かに安政6年の死亡者が突出しており29件もあった。安政7年には15件と半分の水準に減少し、その後の万延・文久・元治年間では10件前後に落ち着いていた。

京都では安政コレラの大流行の際、地域の氏神様の元で「お千度参り」して、疫病の災厄から逃れようとしたとの記録がある。人々は宗教に救いを求め、寺社はそれに応えようと吊いを精一杯つとめ、石碑や供養、お祭りを通じて災禍を後世に伝え、教訓とした。

今回のコロナ禍においても現代の宗教者は、後世の人から見ても恥ずかしくない態度を示しておきたいものだ。

浄土宗の青年僧侶に伝えたい

ぶつぶつ 放談

将来の浄土宗を支える青年僧に
知っておいて欲しい、覚えておいて
欲しい仏教に関する豆知識のコー
ナーです。初回は法然上人鑽仰会に
関わる僧侶が登場します。司会進行
は服部祐淳師（長野教区安養寺副住
職）にお願いしました。

◆登場者◆

齋藤晃道

さいとう・こうどう

1943年岡山市生まれ。祐天寺勤
務。東京大学理学系大学院博士課程
終了後、大正大学大学院文学研究科
博士課程修了。五百羅漢寺住職を永
年務めた。

長谷川岱潤

はせがわ・たいじゆん

1954年東京都品川区生まれ。戒
法寺住職。大正大学大学院仏教学修
了。総本山知恩院、大本山増上寺布
教師。浄土宗人権啓発講師ほか。『ふ
じゅせん』刊行会会長も務める。

〈疫病とご法語〉

司会 新型コロナウイルスの感染拡大が各寺院の法務などにも影響が及んでいます。緊急事態宣言下では本山などの大寺院の多くが参拝中止などの措置を余儀なくされました。

齋藤 奈良の大仏として知られる東大寺の盧遮那仏像はもとも当時大流行していた天然痘を鎮めるために聖武天皇が建立されたことは知られていますし、浄土宗においても大本山百万遍知恩寺も1330年頃、当時蔓延していた「元弘の疫病」を鎮めるため、後醍醐天皇の勅命により7日間、百万遍念仏を修したところ疫病が治まったとされます。人類は細菌やウイルスとの闘いの歴史を持っていますが、そこに仏教が関わってきています。

司会 現代に起こったこの疫病に対し、各寺院も対応に苦慮しています。

齋藤 歴史的にみると「祈りによって疫病を鎮めた」とありますが、その考え方を現世利

益として直接用いることは避けるべきだと思います。法然上人は決してそのようにはおっしゃっていません。

長谷川 ご法語の「宿業しゆくごうかぎりありて」の一説に表れていますよね。

司会 そのご法語とは。

長谷川 「宿業かぎりありて、受くべからん病は、いかなるもろもろの仏神に祈るとも、それによるまじきことなり。」

祈るによりて病も止み、命も延ぶることあらば、誰かは一人として病み死ぬる人あらん。いわんやまた仏の御力は、念仏を信ずるものをば、転重軽受と云いて、宿業かぎりありて重く受くべき病を、軽く受けさせ給う。いわんや非業を払い給わんことましまさざらんや。されば念仏を信ずる人は、たとい、いかなる病を受くれども、みなこれ宿業なり。これより重くこそ受くべきに、仏の御力にて、これほども（軽く）受くるなりとこそは申すことなり」（『浄土宗略抄』昭法全 六〇四）

法然上人は、祈祷の無効性と阿弥陀仏の広大な力をおっしゃっているのだと思います。仏は私たちを決して見捨てないと受け取るべきだと思います。つまり、いま不安感が増大することが最も人々を苦しめているので、そこを救ってあげるべきです。僧侶にできることはそれしかありません。

司会 コロナ禍においては葬送の現場にも変化が生じています。志村けんさんや岡江久美子さんの訃報でも伝えられましたが、遺族はご遺体に触れることもかなわず、火葬された遺骨を受け取ることになります。この点についてはいかがでしょうか。

長谷川 「死」って頭だけでは理解しにくいもので、遺族はご遺体の表情、感触、温度など一つひとつを五感で感じて少しずつ受容していくものだと思います。

葬儀の際も、それまで涙をみせなかった方が、納棺の際にご遺体に触れた瞬間、決壊するように涙があふれる光景をたびたび目の当

たりにしました。

司会 新型コロナウイルスで亡くなられたご遺族はそのプロセスも経ることもできず、突然お骨となって家族のもとに帰ってくるという状態ですよ。

長谷川 少なくとも遺族に寄り添うことが僧侶の役目です。三密に注意しながら、色々な方法で寄り添うことが必要でしょう。

ただ新型コロナウイルス以前から遺族が遺体に触れる機会が減ってきているなども感じます。葬儀の際、例えばお年寄りが亡くなられた際にもお孫さんと呼ばないといったことも度々ありました。近い人の「死」を受け入れることは、その後を生きていくなかでとても大事なことです。それが故人の最後のメッセージでもあるのですから。

齋藤 法然上人の時代に天災や飢饉などが相次ぎ、いわゆる末法といわれるように市中のあちこちに死体が放置されていたといいます。ちょうど芥川龍之介の『羅生門』のような

九相図



人が亡くなった後の変化を示した九相図。
美女が病に伏せ、亡くなり遺棄され、
肉体が白骨化する様子が描かれている。



イメージですよ、死体の衣服や髪を老婆がはぎとっているといったような。こういうことが日常にあふれていて、人が亡くなっている姿を民衆が身近に見ていた時代といえます。

また、遺棄葬といいますが、遺体がある場所に棄ててくるというもので、おそらく病気が伝染することを避けるという意味もあったのでしょうか、あまりに無残なその姿を見かねた僧侶がそこに埋葬して小石を積んで、供養をしたということもあったようです。京都にはその名残として化野・鳥辺野・蓮台野が残っています。

僧侶は「九相観」という観法も行っていたといえます。死体が朽ちていく過程を九段階に分けて観相することで、肉体という煩惱を感じ、無常を目の当たりにしたとも。

現代ではこのような修行はできませんが、僧侶自身が死を多角的に捉えて「死」を適切に伝えていかなければならないでしょうね。

〈布教と教化〉

司会 「僧侶が伝えること」に関連して、以前「布教」について、ある僧侶から質問されたことがあります。

「依頼された浄土宗寺院の檀信徒に法話をするのではなくて、街を歩いている一般の方に広く教えを説くから『布教』であって、檀信徒に説くのは『教化』で、布教にあたらないのでは？」と。これはドキッとしました(笑)。お二人はどうお考えになりますか？

長谷川 布教師の立場からは非常に難しいのですが……。昔、寺内大吉先生、中野東禅先生、僧多聞先生らが行っていた「南無の会」などはその布教にあたるのでしょうね。お寺から出て毎週水曜に喫茶店などで行うといった。司会 質問者からするとそれこそが布教と。齋藤 うーん、難しい質問ですよ(笑)。確かに檀信徒以外の人々にもいかに教えを伝えるかは大切ですね。

特に若い僧侶の方々は、自身が所属する宗派の人だけと関わるのではなく、様々な宗派・宗教の方々、また地域の様々な職種の方々にも人間関係を広げていかないとそういった意味での布教師にはならないでしょうね。

宗派の大学を卒業し、自坊に帰れば、まわりのお寺の方々もそのOBという状況が多いのかもしれませんが、仏教という広大な教えが広がっているのですが、浄土教のただけにとどまってしまうことはもったいないこと。

しっかりと社会をとらえ、仏教、浄土教を説くことに布教・教化の意味があるのではないのでしょうか。

増上寺の日曜大殿説教の案内は三門に看板で掲げられている。



オフィス街にある増上寺では、サラリーマンが足を止めて、説教の議題や文書伝道に見入っている場面をよく目にする。

長谷川 総大本山などで開かれている大殿説教が、誰でも自由に聞くことができる不特定多数への説教（法話）ですから、これはまさに布教なのかもしれませんね。

司会 なるほど、総大本山が布教師会に籍を置く布教師の輪番制で勤めている布教ですね。本日はありがとうございました。

工藤量導



微

風

吹

動

20年後の青い空

こんなはずじゃなかっただろ？

歴史が僕を問いつめる

まぶしいほど青い空の真下で

(ザ・ブルーハーツ「青空」より)

20年ほど前のことだ。大学に入って最初の夏休み。本山で催される修行道場に入行するため、不安と緊張感に苛まれながら寝台列車に乗り込んだ。多くの寺育ちの同年代たちと過ごす3週間の道場。みんなピカピカの丸坊主で、着飾ることも逃げることもできないまっさらな環境に放り込まれた。終わりが見えなかった道場生活も、後半に差しかかると知り合いも増え、段々にぎやかになってゆく。そこで、本山のほど近くに住む友人と仲良くなった。

終わった後は修行仲間たちと打ち上げ。もちろん事前には計画していなかったので、宿をどうしようかと考え悩んだ。すると、その友人が「うちに泊まったらいいよ」とすぐに実家に電話をかけてくれた。急なことで迷惑この上なかったと思うが、友人の母は歓待してくれて、親しくあたたかい時間を過ごすことができた。

その折に「息子がこれだけ短期間で仲良くなるのは珍しいことなのよ。連れてくると言われて、ちよつとビックリしたけれどうれしいわ」と言われた。今考えるといくぶんかの気遣いを加えてくれたのだと思うが、当時の自分は、悪い気はしないどころか、内心うれしくてたまらない。まさに有頂天の気分で、入行前はとてつものなかった憂うつが完全に打ち倒された瞬間だった。

秋口に近くを訪れる用事があり、友人に電話したところ、残念な

がら実家にはいないが、母に言っておくのでぜひ泊っていったらよい、と。ここでもばっちり甘えてしまう。友人の母は茶道の先生もしていて生徒さんが来ていた。お茶を立ててもらい、人生初の本格的なお茶と茶菓子をいただいた。やさしく甘い思い出だ。

年が明けて、また夏が、お盆が近づいてきた。いよいよ今年も修行道場だなど考え始めていた矢先のこと。修行仲間から電話があった。あの友人の訃報を伝える連絡だった。

ほどなく友人の母に電話をかけた。年の近い知人を亡くしたのが初めてで、やや混乱しながらも、とにかく「お寺にうかがって、会いに行ってもいいですか？」と伝えた。友人の母には「ごめんなさいね、今はまだ元氣が出なくて会う気持ちになれないわ……」と返答された。この時の言葉が今でも耳底に深く残り続けている。

それから20年の月日がたつ。その間、何度となく線香をあげに行きたいと思い、電話をとった。……がその都度、あの時の無粋なやり取りがぶり返して気持ちを引っ込めてしまった。前のめりで、相手の状況を慮れない、若気の至りのほろ苦さ。せめて、もう少しだけ立派になってからにしよう。そんな言い訳を重ね続けた。

夏が来るたびに、わずか3週間と数日しか一緒に過ごすことのない友人のことを思い出す。泊めてもらった日の晩、修行仲間た

ちとの打ち上げでカラオケに行った。友人は音楽が趣味だと言っていたが、少しシャイで積極的には歌おうとしなかった。皆にうながされてようやく選んだのが、ザ・ブルーハーツの「青空」。はじめ聞いたその曲の美しい旋律としばれる歌詞、何よりそれを堂々と歌い上げる友人の姿がまぶしく、ほれほれとみとれた。ひそかにこの歌を格好よく歌える大人になりたいと誓った。

今でもこの歌を耳にし、カラオケで選曲することに友人の姿をなぞり描く。液晶テレビの向こう側で、コロナ禍での黒人差別問題やさまざまな社会問題が跋扈する現状を思い知らされるたびに、自然と口ずさんでいたのもこの歌だ。青空はただ誰のためにも等しくある。それだけのこと。ともすれば青臭すぎるほどの正論が、友人の残像を伴い、煩悶する心をズバツと撃ち抜き救ってくれる。

「こんなはずじゃなかっただろ?」。誰にも話すことのないフリーズドライの記憶として封を閉じて時間を止め、苦い想いを蓄え続けた。それでも、今更ながら歩みを少し進めることができる気がしている。といつても、特別に何かえらくなつたわけでもない。当時の情けなさをようやく受け入れることができるようになったのだ。長すぎた青春が終焉する。夏が過ぎたら、バスに乗って、青い空が見守る友人のもとを尋ねてみようと思っている。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第一〇九回

第三部

充実と稔りの白秋へ

澁沢栄一との縁にみちた親交 その八



月下氷人の月下氷人、 インド独立運動の闘士

タゴールと洪沢栄一とは、二十歳以上もの年齢の差と詩人と実業家という両極端な「職業」の違いを超えて初対面にもかかわらずいきなり意気投合したが、タゴールと渡辺海旭とは初来日当初は打ち解けるどころか、海旭は主筆をつとめる「浄土教報」で「仏教徒はタゴールを大乘の玄理へと導く気概をもて！」とまで断じて喧嘩腰ですらあった。

しかし、信仰上の喧嘩を売られたも同然のタゴールは、その喧嘩を買うどころか、その後は海旭とはきわめて良好な関係を築き、海旭も二度と信仰上の異議を持ち出すことはなかった。それどころか、タゴール最後の来日となる昭和四年（一九二九）には、海旭は、洪沢の飛鳥山の私邸での歓迎会に呼ばれただけでなく、その後の歌舞伎座の観劇にも、ごく限られた洪沢の側近の一人として

タゴールに随伴しているのである。

初来日以後のどこかで、タゴールと海旭の関係が反転したことは間違いない。直接的な証拠はないが、状況証拠ならある。それによると、どうやら両者の間をとりもった重要人物がいたらしい。筆者の想像するところ、それはビハリ・ボース。インド独立運動の闘士で、日本の大アジア主義者たちと連携、後に海旭とも因縁浅からぬ仲になる人物である。そして、タゴールはそのボースの蔭の支援者であったと思われる。

本稿の主題は洪沢栄一と渡辺海旭の仲をとりもった月下氷人が詩聖タゴールであることを明らかにすることだが、その前に、タゴールと海旭の仲をとりもった月下氷人がいたことになる。さらに、あらかじめお断りしておくと、月下氷人はボース一人ではない。ボースの先には何人もの月下氷人の連鎖があったのである。

主題である洪沢と海旭との関係からはしば

し離れることになるが、まずはその『月下氷人の連鎖』を辿りながら、インド独立の闘士と宗門きつての『俠客坊主』との出会いと関わりについて筆を進めなおすことをお許しいただきたい。

大アジア主義者・頭山満が ボースを海旭に紹介

ビハリ・ボースは、一八八六年、日本の元号では明治十九年に、インドは西ベンガルに生まれた。海旭より十四歳下であった。十五歳で独立運動に挺身、一九一二（大正元）年末、イギリス人総督に爆弾を投げつけて重傷を負わせ、追跡を逃れるため国外亡命を企図。たまたまタゴールの訪日を知り、タゴールの親戚を騙って、まふまふ日本潜入を果たす。そのとき受け皿となったのは、折しも中国から亡命していた孫文であり、その孫文から紹介されたのは、彼の庇護者で大アジア主義を提唱する頭山満だった。ところが、日本政府

が英国と同盟関係にあることから、半年もしないうちにボースに国外退去命令がでた。そこで頭山は、頭山の信奉者である新宿中村屋の相馬愛蔵・黒光夫妻に匿ってもらい、当局の追及をやりすごしながら、ボースを海旭に紹介するのである。

次から次へと人間関係が連鎖錯綜してまことに恐縮だが、それでは、そもそも頭山は海旭とどのようにして知り合ったのか。

それは、大正時代に入って、国士館大学創立の話が持ち上がり、一人が「発起人」になったことがきっかけであった。海旭はかねてから、「我が国教育界の情勢は欧米の模倣教育に墮し、文部省等もまた形式完備にのみ齟齬あきせきして日本人たる独自の教育を忘れ、教育の教育あって人間の教育なし」と嘆じていたが、それを芝中学の教え子である柴田徳次郎が受け止めて、「だったら先生、自分たちで大学をつくりましょう」と言って、柴田が「興亜運動」の鼓吹者として共鳴・私淑する頭山を



大正5年国士館にて。右前列から徳富蘇峰、洪沢栄一、野田卯太郎、頭山滿。
後列右から柴田徳次郎、渡辺海旭

「創立発起人候補」として海旭を紹介。それが機縁となって、頭山からボースを紹介されたのである。

以来、ボースはしばしば、海旭が住職をつとめる西光寺へお忍びでやってくるようになる。海旭は弟子たちが心配するのを制して本堂へ上げると、しばらく歓談をしたあと、何がしかの支援金を渡して帰す関係がはじまった。

インド独立運動闘士の自死と 俠客坊主の面目躍如

さらにボースと海旭との付き合いを劇的に深める出来事がおきる。大正十年（一九二一）六月、ボースのインド独立運動の同志であるアタールが自殺したのである。アタールは亡命先の東京外国語学校（現・東京外国語大学）ヒンドスターニー（ウルドゥー語）科で教鞭をとっていたが、当局から内偵をうけており、ついに堪えきれずに自ら命を断つたものと思

われた。その通夜の席に、日本におけるインド独立運動の中心であるボースはもちろん、その有力支援者である海旭も、頭山とともに連なっていた。

アタールの通夜は、死に方が死に方だっただけに、我が身の安全を考えるものもいるらしく、列席者も少なく寂しいものだった。お清めの席で、明日の本葬の挙行を危ぶむ声があがると、海旭はすつくと立ち上がった。想いがこみ上げるほどに強まる生来の吃音をつのらせ、こう宣言して、ボースら主催者と会葬者を大いに驚かせた。

「ひ、費用なら、僕が出す。ほ、僕が導師となつて、アタール君をしつかりとおくつてみる」

ボースと会葬者を驚かせたのはそれだけではなかった。本葬も終わり、茶毘に付したあとの席で、海旭はアタールの遺骨を故国のインドまで送り届けようと決然として訴えたのである。

「わ、私の教え子が、近タインドの仏蹟を廻わるというので、アタール君の遺骨をたのんだところ、こ、快く引き受けてもらった」

教え子とは青柳貫孝。新潟県高田（現・上越市）の浄土宗の善導寺の元住職の長男だった。同寺は文明七年（一四七五）開山、地元では「高田で大きなものは善導寺の仁王さま」と言い伝えられてきた名刹だが、中学四年のとき父が急逝、後継をめぐる檀家の寄り合いで新住職を迎えることになり、青柳の遺族は体よく寺を追われることになった。それを聞き及んだ海旭は青柳を東京へ呼び寄せ、西光寺に寄宿させると、校長をつとめる芝中学に転校させ、さらに宗教大学（現・大正大学）へ進学させる。その費用は海旭が支援した。

青柳はかねてから茶道に関心があり、大学卒業後、遠州流顧問小宮山守正師より「茶道師範免許」を取得。やがて仏教発祥の地に赴いて仏跡を訪ねながら茶道をひろめたいという遠大かつ高邁な志を抱くようになる。それ

を知った海旭は大いに感銘、このときはばかりは目ごろ折り合いの悪い宗門要路を説得して回って青柳のインド行を実現。そこへインド独立運動の闘士アタールの自死が起きたのである。

青柳にとっては、インド行の途次とはいえないかなりの危険がともなう「別件」だが、幼少時からの字義通りの恩師の頼みとあつては、「否や」のあろうはずはなかった。

と、会葬者の一人から疑義の声があがった。「しかし、渡辺君、アタール君の一身に關しては、これ以上深く立ち入らない方がいいんじゃないかね。すでに本葬儀の時にも、君一人が取り仕切ったというので、その筋が目を光らせているそうだからね」

「そ、それは覚悟の上だ」と海旭は決然と答えた。「ア、アタール君によし罪があるにしても、死んでしまったら仏じゃないか。アタール君も、海山万里を距てた日本で客死したことは、よほど心残りのはずだ。坊主は仏法に

生命を托してゐるんだ。仏の世話をして、そのために、何か浮世の禍を招くようなことがあつたとしても、それは坊主としては本懐じゃないか」

まさに「俠客坊主」の面目躍如といったところだが、最後に「お上の威光」など恐れないうお手本としてついに宗門開祖を引き合いに出したのは、ボースと頭山を含む会葬者を啞然とさせた。

海旭は莞爾としてこう言つてのけたのである。「こゝ、御開山・法然上人は、七十歳半ばで土佐へ流されたとき、これで鄙（しづ）の人々に仏の教えを伝えることができると、お喜びなさつたためしもあるじゃないか」

さて、お待たせをした。海旭の教え子のインド行によつて、ここからいよいよ「詩聖」タゴールが登場することになるのだが、残念ながら紙幅が切れた。講談の常套手法のようでもことに恐縮だが、この続きは、次回のお楽しみとさせていただきます。

(つづく)

戸田葬祭場

創業 昭和2年3月29日
住所 東京都板橋区船渡4-15-1
敷地 13,382㎡
炉数 特別殯館2基 特別室5基 最上等8基

オフィス
訪問



戸田葬祭場

ルポライター 真山 剛

令和2年2月21日、クルーズ船で新型コロナウイルスに感染し亡くなった84歳の女性を受け入れ火葬したのが戸田葬祭場だ。

明治20年に創業された東京博善社は「遺体を荼毘に伏す」という仕事は宗教的使命でもあると僧侶が経営、そこに名を連ねた宇都宮日網（日蓮宗大本山法華寺貫主）、中山理々（浄土真宗東本願寺派法善寺住職）が埼玉県の戸田村で昭和2年に創立したのが関東電気生化学株式會社、現在の戸田葬祭場である。

最寄のJR埼京線の駅名「浮間船渡」からわかるように、戸田は江戸時代から水運の要衝。その水運とは荒川だが、荒川が大きく蛇行、もともと埼玉に作ったはずの火葬場が東京の火葬場となった。住所は東京都板橋区船渡4丁目になる。

この戸田葬祭場、近年大きくリニューアル、日本でここだけという管理システムを導入、散骨専用の無人島を所有し、遺石ペンダントやプレスレッドなども扱う。このリニューアル

ル、二人の仕掛け人によるもの。一人はJALグループの会社退職後に入社した佐野正信専務取締役、もう一人は三井住友銀行出身の宮嶋研治取締役所長。

訪問して目を惹かれたのが、キャビンアテンダントを思わせる男女の制服と行き届いた接客だったが、二人の話を聞いて納得した。佐野専務、入社直後は遺体処理という仕事にカルチャーショックを受けたそうだが、この業種に新しい息吹を吹き込んだ。加えて元銀行マンの遺族の悲しみに寄り添うことに専心する緻密なおもてなし。火葬場を選ぶことは難しいが、戸田葬祭場は大事な人を心込めて見送ることができる葬祭場のひとつだ。

仏教鑽仰會と中山理々

昭和16年に設立された財団法人日本佛教鑽仰會。平和運動、遺骨収集、仏教行事などを行ってきたが、現在は宗派を超えた仏教講演会を中心に活動している。この会の創設者中山理々が戸田葬祭場初代社長である。

さっちゃんね

かまちよろう



編集後記

本誌『浄土』の編集長を25年間務めた長谷川岱潤師が編集長を勇退、理事長に就任、理事長の加藤昌康師は副会長に、そして新編集長に村田が就任しましたので、編集後記ならぬ編集好機としてお伝えさせていただきます。

本誌を発行する法然上人鑽仰会は昭和10年に発足、同年5月より『浄土』を発行。真野正順師、中村弁康師など浄土宗の有志僧侶により、宗祖法然上人の教えのもと、一宗を構える浄土宗へ、そして全国7700ヶ寺の浄土宗寺院に声援を送るべく立ち上げた会で、以来今日までその志にご賛同いただいた会員の支援だけで支えられてきています。そして本号

が通巻923号、戦前の全盛期には月刊『文藝春秋』と並べられ駅売りもされていきました。

さて、気付けば62歳という還暦過ぎの新人編集長の役目は当会の継続、つまり本誌を一人でも多くの方に愛読し続けていただくこと、次なる編集長を見つけていただくこと、の二つです。振り返れば大学卒業後に出版社に入社、12年の編集部勤務後、お寺の世界に飛び込んだところ、当時の小川有順編集長にお声掛けいただき本誌に携わらせていただきました。その縁で今の私と自坊があるようなもので、恩返しの時を迎えたようです。

力を伝えることが難しい時代ですが、この『浄土』が一人でも多くの方に楽しみにしていただける雑誌を目指します。ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。
(村田)

編集長
編集部員

村田洋一
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
平井泰代子
本原克道

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・順成寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・美鈍院)
成田憲恵(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多将敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ jodo.ne.jp/
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

浄土

八十七巻 九月号頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 令和二年八月二十日

発行 令和二年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 長谷川岱潤

印刷所 株式会社 晴印刷

〒105-0011

東京都港区芝公園四丁目四番地四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 03-5788-6947

FAX 03-5788-0366

振替 00180-8-8218

写仏、写経、写詠歌のご案内

- 1 A4版の奉書の手本に筆ペンで直接なぞります。
- 2 写仏の仏画は仏師（前田昌宏師）のオリジナル。
- 3 写経は浄土宗日常勤行式です。
- 4 写詠歌は法然上人四季の和歌と宗歌「月かげ」他。



申し込み日 年 月 日

お名前 個人

寺院 教区 組 寺・院 寺院番号

お電話

ご住所 〒

写仏(6枚1組入り) 頒価:2,000円 セット

※ 3組 5,000円、10組18,000円他割引きあります。

写経(12枚5組入り) 頒価:6,000円 セット

※寺院名 () 入れる(無料) 寺院名 () 入れない

※三奉請(関東)と四奉請(関西)をお選び下さい。() 三奉請 () 四奉請

写詠歌(5枚10組入り) 頒価:5,000円 セット

※送料、消費税は頒価に含みます。同封の請求書でお支払い下さい。

※お届けまで 2 週間ほどかかります。

※ 写仏と写詠歌は 1 組からでも注文できます。詳細はお問い合わせ下さい。

《お申し込みは本頁をコピー、ご記入の上、当会へご注文下さい》

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

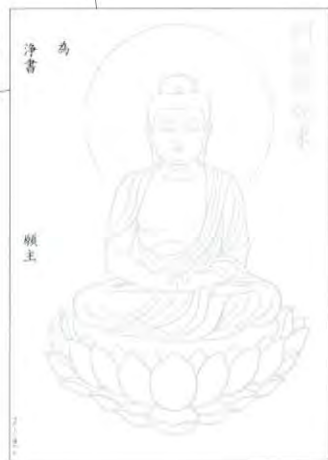
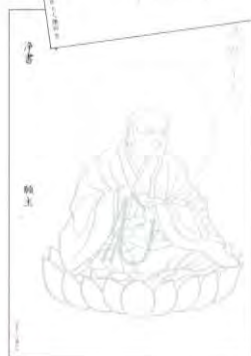
FAX : 03 3578 7036 Mail : hounen@jodo.ne.jp

TEL : 03 3578 6947

疫病退散を願ひ

仏さまを 写しましょう

当会オリジナルの「写シリーズ」に
写仏が新登場。ゆっくりした時間のなか、
ご自宅で仏さまや法然上人のお姿
をなぞって心を通わせましょう。



【写仏】6枚1セット

阿弥陀如来

観音菩薩

勢至菩薩

薬師如来

地藏菩薩

法然上人

※
お申し込みは
裏面へ

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館 4 階
お問い合わせは FAX またはメールでお願い致します。

FAX : 03 3578 7036 Mail : hounen@jodo.ne.jp

TEL : 03 3578 6947